瀬戸内発見伝

巻之百二十二

備前焼作家・森陶岳氏の魅力

瀬戸内市立美術館で特別展「森陶岳（とうがく）の全貌展－あくなき挑戦の軌跡－」が9月3日から開催されます（本紙13ページ参照）。

作品の9割が、岡山では初公開、備前焼作家・森陶岳氏の20代から現在に至るまでの代表的な作品を網羅した内容に、大きな注目が集まっています。

備前焼の名家の血筋 教師から作陶の道へ

1937（昭和12）年に備前市伊部に生まれた陶岳氏は、室町末期から続く備前窯元六姓の一つである森家の流れをくんでいます。

岡山大学特設美術科を卒業後、兵庫県龍野市の中学校に美術教師として3年間勤務します。しかし、陶芸への強い想いから、1962（昭和37）年に職を辞し、作陶生活に入ります。

古備前を超えることを目指し、大窯へ挑戦

その才能は早くから開花し、32歳という若さで日本陶磁協会賞に輝いたことは圧巻の一言です。

しかしその後、陶岳氏自身は自作の力不足を感じるようになります。そして、目の前にそびえる「古備前」を超えることを目指し、1972（昭和47）年ごろから大窯への挑戦が始まるのです。

「彩文土器（さいもんどき）」
京都国立近代美術館所蔵

相生大窯から寒風へ 空前の規模の新大窯に挑む

陶岳氏は兵庫県相生市に全長46メートルの大窯を築窯（ちくよう）し、1980（昭和55）年に焼成（しょうせい）します。次に、現在地の寒風（瀬戸内市牛窓町）に全長53メートルの寒風大窯を完成させ、1985（昭和60）年から計6回の焼成を行いました。

これらの成果の積み重ねが高く評価され、2002年には陶芸界で最高の評価ともいえる日本陶磁協会賞金賞を備前焼作家としては初めて受賞しました。そして、全長85メートルもの空前の規模の新大窯に挑むのです。

世紀の大挑戦 全長85メートルの新大窯とは？

古備前の力強い味わいの秘密が、室町時代から江戸時代に使われていた共同大窯の膨大な熱量にある、という考えのもとで、陶岳氏は大窯に挑みました。

その失われた技術とエネルギーの再現に長年向かい合ってきた集大成が、27年もの歳月をかけて築いた、全長85メートル、幅6メートル、高さ3メートルもの巨大な窯です。

2010年から14年まで窯詰めを行い、昨年、昼夜を問わない107日間にも及ぶ窯焚きを終えました。用意した薪は、4千トンにもなります。

そして、窯出しを無事に終えました。それは陶芸史に刻まれる、世紀の大挑戦と言っても良いかもしれません。

夢と希望を与えてくれた一人の作家の情熱

このように陶岳氏の歩んだ道のりから感じられる魅力とは、どのようなものがあるのでしょうか。

いくつもあると思いますが、一つには「一人の作家が古備前の謎解明への無類の探求心と、けた違いの情熱により、納得のいく作品誕生に向かって一途に突き進み、やがて世紀の大挑戦を成し遂げる」という、夢と希望を与えてくれたことがあげられるのではないでしょうか。

ぜひ、その情熱が生み出した結晶の数々を、この機会に瀬戸内市立美術館（寒風陶芸会館でも連携企画実施中）でご覧ください。

「砂壷」
東京国立近代美術館所蔵

問 秘書広報課：☎0869-24-7095

夜 空に大輪の花を咲かせる

2016 牛窓花火大会

夜空と水面を美しく彩った花火

8月6日、牛窓港周辺（牛窓町牛窓）でせとうち花火実行委員会２代目花火あげ隊による「2016 牛窓花火大会」が行われ、約２千発の花火が夜空と水面を彩りました。

昨年復活し、今年も続けようと、花火あげ隊による募金活動などが行われ、開催に至った牛窓花火大会。打ち上げが始まると、観客の視線は一斉に上空にくぎ付けに。次々に現れる色とりどりの花火に、観客からは自然と称賛の拍手がわき起こっていました。

泥 まみれで楽しく交流

FOS 泥んこ大会

梅雨の真っ只中、晴天に恵まれた６月 26 日、邑久町豊原の田んぼで瀬戸内市 FOS 少年団連盟は、備前市日生町 FOS 少年団連盟の団員を迎えて、泥んこ大会を開催しました。

小学生の団員、指導者、保護者約 90 人が参加。水を張った田んぼの中でドッジボール、フライングキャッチなどをチームで競い、尻相撲などで全身泥まみれになりました。

最初は泥水に入るのをためらっていた子どもたちも、いったん足を入れると、走ったり、座って遊んだり、ダイブしたりと、日頃できない泥んこ遊びを大いに楽しみました。

白熱したフラッグ（左上）／お互いの息を合わせてボールリレー（右下）

い つまでもお元気で

100 歳を迎えた高齢者をお祝い

お祝いの花束を手にする長田さん（写真左から２番目）

7月 21 日に満 100 歳を迎えた長田貞香（おさださだか）さん（邑久町尾張）のお祝いに、28 日、武久顕也市長らが入院中の病院を訪問しました。長田さんは家族と共に「ありがとうございます」と笑顔でお祝い状を受け取りました。

若い頃は歌が上手で舞台に出たこともあるという長田さん。ばら寿司を作らせたら天下一品と、子どもから太鼓判を押されるほど料理が得意だったそうです。

長田さん、これからもますますお元気でお過ごしください。